

## 立教大学での4年間の学び ―伝えられる大人になるために―

観光学部交流文化学科

寺井 朱里

(2021年3月卒業)

私は2021年3月で立教大学を卒業する。大学4年の最後の1年間は新型コロナウイルス感染症といった、世界的な課題に直面することになり、私の日常生活も大きく変化した1年だった。卒業するに際し、立教サービスラーニングセンターの方から、立教大学ボランティアセンターや立教サービスラーニングセンターとの関わりも含めて、私自身の4年間の学びを書いて欲しいという依頼があった。

改めて4年間の大学生活を振り返ると、いくつもの経験、人、言葉、生き方といったものとの出会いが、私の中で繋がり、今の自分をつくっていることを強く感じる。私は自分の4年間の振り返る機会にもなると思い、今回のこのお話を喜んで引き受けることにした。以下に立教大学ボランティアセンターや立教サービスラーニングセンターとの関わりを通じた私の立教大学4年間の学びを記すことにする。

### ―農業体験 in 山形県高島町―

私の大学生活の出発点は、大学1年生の夏休みに参加したボランティアセンターが主催する高島農業体験だ。大学生になったばかりの私は、「経験したことのない農業、民泊をやってみたい!」とワクワクしていた。山形県高島町は、農業を使うことが常識だった時代から長い間変わらずに有機農業を続けてきた地だ。農業体験は、高島の豊かな自然やこだわりを持ちながら農業を続ける人々との関わりの中で、「生命」「食」「共生」について考えるプログラムである。5泊6日の農業体験の内容は主に、援農、講演、交流会、自炊、民泊など盛りだくさんだ。援農先の農家では、田んぼの草刈り、野菜の収穫、米袋作り、ぶどうの剪定といった作業を体験した。

横浜で生まれ育ち、東京で暮らしている私は、農作業はもちろん、畑や田んぼの景色にもほとんど触れずに生きてきた。そのため、食べることは好きだったが、毎日の食事の時間に、食べ物に興味関心を持ったり、何かを意識したりすることなく、食事を済ましていた。農業体験でそれぞれの作業を体験したのは数時間ではあったが、自分の体を動かし体験したことで、お米や野菜を一から育てる地道な過程にある苦労を想像することができた。また、畑で収穫した野菜を自分で調理して食べることの喜びを知った。それからは、食卓やスーパーマーケットで目の前にある食べ物に興味がわき、その背景にある長い道のりを想像するようになった。

さらに、農業体験の中で、高島の人たちの言葉や姿勢に触れ、彼らが作物への愛情や「高島」という土地への誇りを持っていることを私は知った。ある援農先で「なぜ有機農業を続けているのか」という私の問いかけに対して、ある組合員の方は

「まず、家族。家族が健康でいてほしいから。」

と答えた。当時の私は、この答えから、その組合員の方の周りの人への想いが、高島が有機農業を長く続けていることに繋がっているのだと理解するにとどまっていた。

しかし、農業体験のプログラムを終えて、日本の食の安全が脅かされていることを知ったり、様々な仕事をする大人と出会ったり、自分の将来についても考えるようになった今振り返ると、その言葉にはその組合員の方の生き方そのものが表れていることを感じる。その組合員の方は、手間をかけてでも農薬を使わずに安全で美味しい食べ物を作る道を選んだ。それは、大切な家族と自分の信念を守る生き方だったのではないかと今の私は思う。

また、この農業体験は正課外教育のプログラムであったため、学年も学部も異なる学生たちと出会うことができた。この出会いも私にとって想像以上に大きなものだった。彼らとは、プログラム中、慣れない農作業で汗を流したり、それぞれ想いを共有して感動したり、収穫した野菜を調理して「おいしい、おいしい」と言い合って食事したりした。そういった大学の教室の中には決してない空間を共にしたからこそ、普通の友達とはどこか違う関係性になった。農業体験を終えて時間が経った今でもお互いがやっていることに関心を持ち、それぞれが出会った面白いものをたまに連絡を取り共有しあっている。

今、5泊6日の農業体験を思い出すと「とにかく楽しい！」という感情が蘇る。お皿洗いの時間すら、たまらなく楽しかったのを覚えている。それは、私が中高一貫校の女子高で過ごして来たことも影響しているだろう。大学生になるまで自分と同じような環境で生きてきた人たちに囲まれて過ごしてきた私にとって、高畠という自分の暮らす場所とは全く異なる環境で生きてきた人たちや、同年代の学生たちと限られた時間ではあるものの共同生活を送ることは、当時入学したての1年生だった私にとって新鮮で、自分の体を動かし、今までにない感覚を味わうことが刺激的だったからなのだと思う。高畠で過ごした時間の中で、知らない土地を訪れ、そこで出会った人と新たな経験をするものの面白さを身をもって感じた。さらに、自分の興味の向いたものに一步踏み出してみると、何にも変えられない経験や素敵な人との出会いがあると経験したことはひとつの自信にもなり、それから先の大学生活で何か新しいことに挑戦したいと思った時、高畠での経験は背中を押してくれるものとなった。

## —「RSLーローカル（南魚沼）」—

2年生になる春休みには、農業体験のように、知らない土地を訪れ、新たな経験をしたいと思い、「RSLーローカル（南魚沼）」に参加した。この科目は世界でも最豪雪地帯とされている新潟県南魚沼市栃窪集落を訪問し、「持続可能な社会」「自然環境との共生」「過疎・高齢化社会の現実」「豊かさとは何か」について、雪掘り活動や地域住民の方々との交流、雪国の伝統文化体験などを通して考えるものだ。授業構成は、事前学習（1回）、3泊4日の現地活動、事後学習（1回）となっていた。

栃窪集落に到着した時、道路の脇に壁のように積み上がっている雪を見上げて、見慣れない光景に気持ちが高揚した。栃窪集落では雪の量が非常に多く、一軒家の2階の高さまで積もることも珍しくないため、除雪作業のことは雪かきではなく、雪掘りと呼ばれている。実際、家の屋根に登り、雪を運びやすいようにブロック状にするために掘る作業は、正に雪掘りだった。雪かきすらしたことのない私は慣れない作業にすぐに疲弊した。さらに、一所懸命に雪掘りをして翌朝には元通りになっているとはわかっていながら雪掘りをしなければならない毎日を想像し、栃窪集落に暮らすために必要な忍耐力を感じた。ホームビジットをした際、ある住民の方は、「11月が嫌だ。さみしい気持ちになる。」と言っていた。11月は雪が降るか降らないかという時期で、雪掘りをする日々が迫り、憂鬱になるそうだ。この雪が理由で集落から出ていくという人や移住して来ても雪と付き合う暮らしが続かない人も多いという。こういった豪雪地帯ゆえの雪と切っても切り離せない暮らしの中にある苦しさを知った。

しかし、このように私が雪と付き合う暮らしの苦しさを感じたことを住民の方に話した際、住民の方に向けられた言葉は、

「雪が多いのは大変ではあるけれど、私たちはいつも雪を使って楽しんで生きてきたんですよ。」

というものだった。雪国の過酷さがある一方で、栃窪集落の暮らしには、豊かな自然の恵み、伝え続けられてきた伝統文化が溢れている。その住民の方の言葉が表す通り、私は滞在中に、栃窪集落だからこぞできる経験をした。雪灯籠、どんと焼き、ちまき作り、わら細工といった伝統文化をはじめ、雪で保存した美味しいキャベツもいただいたり、餅で作られている正月飾りを外しておかきにして食べたりといった経験もした。特に、かんじきを履いて雪山を歩く雪山ハイクは栃窪集落の自然の豊かさを全身で堪能する贅沢な時間だった。雪山ハイクでは、まだ足跡のついていない一面の雪山をわらで作られたかんじきを履いた足で、一步一步踏みしめて進んでいく。長靴のままでは、深い雪に足が埋もれて進めないが、かんじきをはくと地面にかかる体重を分散してくれ、雪の上を歩けることに感心した。雪山を登ったところで、参加者たちがそれぞれ至る所に散らばり、40分ほどそれぞれひとりになる時間があつた。雪山に寝転がると、雪の冷たさが体に伝わり、目を瞑ると澄んだ空気の中で木々、雪、風、動物、様々な自然の要素が織りなす音が聞こえた。広大な雪山の絶景を目の前に、雪で作ったテーブルを囲みながら飲む温かいコーヒーは、本当に美味しく感じた。

この「RSL-ローカル（南魚沼）」で栃窪集落の暮らしや伝統文化を体験し学んだことは、「苦難があるところにこそ、文化は育つ」ということだ。暮らしていく上で、思い通りにならないことがあるからこそ、人々は知恵を絞り、生きていくために乗り越える術を編み出してきた。それぞれの地域が持つ環境や歴史、風土が違うからこそ、その土地に根付く人々の暮らしや文化は異なる。「違う」ということの豊かさを感じた

さらに、栃窪の暮らしや伝統文化が育まれてきた背景に、栃窪で暮らす人たちの「思い通りにいかないことを楽しみに変える」という姿勢があることを感じた。住民のひとりである高齢の女性は自分の生き方を「置かれた場所で咲きなさい」という言葉で表していた。その方は、栃窪の食材で作った旅館の懐石料理のように繊細で色とりどりのお料理を私たちのために用意してくれ、冬は毎週スキーをしているという明るく生き生きとした人だった。栃窪集落に暮らす人たちには、ないものをねだるのではなく、あるものを生かすという考えが当たり前にある。この考え方が根付いているからこそ、足りないものを容易な方法で補おうとすれば簡単に失われていくであろう古くから伝わる伝統文化が栃窪では守られ続け、暮らしの中にある知恵は育まれているのだと感じる。

今振り返り、栃窪での経験は、地域の自然、歴史、社会、暮らす人たちの気風といったものたちが互いに影響しあい、その土地ならではの文化や暮らしを生んでいるというごく自然な成り立ちについて教えてくれたことに気づいた。そして、「違う」ということの豊かさを感じた場であった。

## ー 一貫連携教育・立教学院 清里環境ボランティアキャンプー

3年生になり、農業体験の仲間に誘われ、立教大学唯一のよさこいチーム「立教大学よさこい連百合文殊」に所属した。一般的なサークルでは引退する学年だったが、創設されてから日が浅く、チームの受け入れ体制も柔軟だったため、挑戦することにした。中高時代からダンスに苦手意識はあったが、人前で何かを見せることや音楽に合わせて体を動かすことが好きだったため、「踊ってみたい!」という気持ちに従った。また、昔から種類を問わず、お祭り特有の活気が好きであったため、お祭り



を見る側でなく、自分がお祭りを盛り上げるひとりになりたいという思いもあった。これまでの大学生活では、長期休みにプログラムに「参加」することが多かったため、よさこいを始めてからチームに「所属」し、仲間と練習に励む日々は私にとって新鮮だった。炎天下の中でも仲間と汗水流しながら練習し、お祭りで大勢の人の前で、力いっぱい踊るのは心から気持ちがよかった。私はよさこいで経験を通して、自分がひとつの目標に向かって仲間と取り組むことが好きだと改めて実感した。

そのようななか、3年生の夏頃から就職について考え始め、やってみたい仕事が見つからないと感じていた頃に参加したのが、ボランティアセンターが主催する清里環境ボランティアキャンプだった。昔から子どもと接することは好きだったが、大学生活では「地域」「自然」といったキーワードの企画に多く参加しており、「子ども」を主軸としたものには参加することがなかったため、参加することにした。また、自分の得意なことや好きなことに改めて向き合い、将来について考えるヒントを得られたらいいなという思いもあった。

このキャンプは自然豊かな清里清泉寮を拠点に、立教学院の小・中・高生、大学生たちが、共に取り組む自然保護活動だ。大学生は単なる参加者ではなく、プログラムを企画し、運営する立場となる。

2泊3日のメインプログラムとなるボランティア作業は、森の中の自然歩道を歩きやすく整備するといった目的で行われ、雨でぬかるみ歩きにくくなっている自然歩道に石を敷き詰めたり、雨が自然歩道に溜まらないように、のこぎりで切った材木で水路を作ったりした。

特にこのボランティア作業では、みんなでひとつの目標に向かって力を合わせるという環境の中で、一人ひとりの個性が生かされた場になった。例えば、普段の環境だと周りが見えなくなり怒られがちな小学生は、歩道にひき詰めるのに丁度いいサイズの石をこだわりを持って一所懸命に探していた。冷めた雰囲気を出していた中学生は、のこぎりを使って材木を切るという力作業を任せられ、自分の役割を持ったことで、生き生きとしはじめ、自分より年下である小学生の体力や気持ちを気にかけながら作業していた。

このボランティア作業の目標であった自然歩道を歩きやすいように整備することが終わったにもかかわらず、子どもたちは道の脇に2つの木をツタで巻き付けて十字架を作り、周りを葉で飾り付け、その遊歩道をさらに素敵な空間にした。

このような光景を清里で目にして、私は人と人の関わり合いについて考えることができた。チームのメンバーは、当然ながらそれぞれ興味があること、得意なこと、苦手なこと、好きなことが一人ひとり異なる。これは子どもたちだけに限らず、大学生や先生方、大人にも当てはまる。互いの不得意なことを受け入れ、それぞれができることを出し合い、補い合い、一人ひとりがその人なりの役割を持つ。そうすることで、それぞれの力が発揮され、場全体に前向きな姿勢が伝染していく。この3日間で、大切なことは、どんな人にも苦手なことがある一方で、その人にしかない力があることを心にとめ、それぞれの個性をその人に合った形で活かすことだと感じた。

また、立教小学校のある先生との出会いが私にとってとても大きかった。その先生がゲストとして来た大学生の事前研修では、小学生と普段関わりがない大学生に向けた小学生の特性や接し方についてのお話やプログラム前に大学生同士でご飯に行き関係性を築くと良いとアドバイスをしてくださった。丁寧な話し方でありながら、独特な雰囲気を持つその先生の言葉や佇まいに引き込まれ、私は事前研修の頃から注目していた。プログラムが始まり3日間、その先生が生徒たちと関わる姿を近くで見ることができた。その先生は子どもだからといって生徒が話していることを流し聞きしてしまうことはなく、大人と話すかのように、相手に興味を持ち、子どもたちと会話をしていた。私は、その先生は接する相手が大人だろうと子どもだろうと関係なく、相手をひとりの人として尊重しているように

感じた。

東京に帰った3日目の夜に行われた大学生と先生方の打ち上げで、私の向かいにその先生が座ると突然先生に問いかけられた。「さっき振り返りの時、子どもたちと話していて楽しかったと言っていたじゃない。あれって嘘？」私は動揺したまま「え、本当です。」と答えると、少し間を置いた後にその先生は、こう言った。

「あかりさん、あなたは人と関わる仕事をしたほうがいい。あなたは人を幸せにする力があるから、本当に。」

人間観察が趣味だというその先生は、プログラム中に大学生のことをよく観察していて、3日間私が子どもたちと接する姿を見て、感じたことを一つひとつ話し始めた。出すぎず、引きすぎず、子どもたちとの接し方に安定感があると思ったということや常に私の横にくっついていていた小学生について、男の子はこの人じゃないと思ったらすぐ関係を切るから、聞くことや寄り添うことをしていた私に安心感があったのだろうということ伝えてくれた。翌日メールでお礼をした際にいただいた返信も、私にとって今でも大切な言葉だ。

「あなたの人との関わりはとても丁寧で、きちんとその人に心を向けていることが分かりました。目立つことで人の心を惹くことはできて、それって真の寄り添いではないと思っているの。」

その先生はまっすぐに私の目を見て、言葉を伝えてくれた。思いもよらない言葉に驚くと同時に、先生の優しさと嘘のないと思える言葉が心の深くまでビシビシと伝わってきた。人の言葉でこんなにも心を突き動かされたのは初めての経験だった。そして、こんな風に自分を認めてもらい、さらにそれを言葉にして丁寧に伝えてもらったことに、感謝の気持ちが溢れた。

このプログラムを通して、私は人と出会い関わること、チームでひとつのことに取り組むことが好きだと改めて実感した。さらに、比較的自分より年下の相手と接する時には、自分らしく、自然体で関われるため、自分の持つ力を発揮することができると感じた。これらのことに気づきつつも、自分自身はまだ自信を持てていなかったが、立教小学校の先生の言葉によって、自分の中のその不確かな気づきを自分自身で認めることができた。それから、自分に人を安心させる力や寄り添う力があり、それが誰かのためになるのなら、自分にある力を活かして仕事をしたいと考えるようになり、子どもと深く関わる仕事に強く興味を持ちはじめた。

### —自然と人間の共生とグリーンウッドでのインターンシップ—

3年生の秋学期、よさこいと同じく農業体験の仲間に「絶対、寺井好きだから！」と勧められて履修した授業が、辻英之先生の「自然と人間の共生」だ。辻先生は大学の教授ではなく、長野県の泰阜村で、主に山村留学事業「暮らしの学校いだらぼっち」（以下いだらぼっち）やキャンプ事業「山賊キャンプ」を行うNPO法人グリーンウッド自然体験教育センター（以下グリーンウッド）の代表だ。グリーンウッドは誰もが安心できる社会を目指すためには、「人を育てる」ことが大切だと考えており、地域に根差した暮らしこそが子どもの生きる力を育てるという信念のもと、活動している。グリーンウッドの主管事業である「暮らしの学校いだらぼっち」では、全国から集まった小中学生が泰阜村の学校に通いながら共同生活をしている。子どもたちは自分たちの生活に責任を持って暮らして

いるため、食事を作ること、お風呂を焚くこと、薪を割ること、お皿をつくることなど、生きるために必要なことを子どもたち自身の手で行っている。

初回の授業では、だいだらぼっちの様子を映像で見た。清里での経験を経てから、子どもと深く関わる仕事といっても数多く種類があり、その中で自分はどんな仕事をしたいかを思い悩んでいた私は、「こんな風に、自然に囲まれた中で子どもと生活をできるとは、なんて楽しそうなのだろう！世の中にはこんな仕事があるのか！」と、映像の中で子どもたちが自然の営みを感じながら共同生活をする様子に強く惹かれた。その直感に従い、私はグリーンウッドへ1週間のインターンシップに行くことに決めた。大学3年生の冬休み、12月の中旬に私は泰阜村を訪れた。インターンシップの1週間では主に、地域の子どもの学童保育、山賊キャンプの資料作成、だいだらぼっちの暮らしに関わった。

まず、だいだらぼっちの暮らしを経験し、相談員という大人の在り方について考えた。グリーンウッドでは子どもと関わるスタッフのことを相談員と呼ぶ。大人としての責任は当然あるが、だいだらぼっちでは相談員も子どもと同じ仲間として暮らしに参画しており、そこには私が先入観として持っている教育の場にある「大人だから知って当然」、「子どもにはできなくて当たり前」という空気はなかった。大人と子どもとの間にあるのは上下関係ではなく、人としての対等な交わりだった。そこには大人の完璧な姿ではなく、失敗する、全力で取り組む、楽しむという多様な大人の姿があるから、子どもも失敗を恐れることなく、安心して挑戦することができる。お互いの失敗や成功、そこに生まれる喜びや悔しさを近くで感じることで、子どもたちと相談員の間に信頼関係が築かれていく。相談員と子どもたちが作り出す循環は、新たに学ぶ心、共に挑戦する姿勢といったプラスな力を場に生み出していた。

また、だいだらぼっちには人、自然、歴史といったものとの「繋がり」を感じる暮らしがある。私が滞在したたった1週間でもそれを感じる場面が数え切れないほどあった。よさこいで首にかけられる木札を自分でつくること、卒業生の保護者の方が育てたというみかんを食べること、子どもたちが沸かしたお風呂に入ること、村の方が作ったお米を食べること、卒業生が作った椅子に座ること、子どもたちのギターに合わせて歌うこと。だいだらぼっちでは、どこにいても、何をしていても、誰かの温もり、想いを感じた。だいだらぼっちの暮らしは、誰かが心を込めてつくったもの、守られ続けてきた自然の営み、時間をかけて築かれてきた歴史、そういったものに囲まれていた。お金はかかっていないし、便利でもない。効率も悪いし、華やかでもない。しかし、私はだいだらぼっちの暮らしを「なんて豊かな暮らしなのだろう」と心から思った。

当初、私は「仕事を知る」という目線でインターンシップに参加した。しかし、仕事について考えるより、もっと根本的な「どんな人と生きていきたいか」「どんな暮らしをしていきたいか」といったことを考えるきっかけとなった。

## ーオンライン授業での学びー

4年生の1年間はコロナウイルスの影響でオンライン授業となり、キャンパスで授業を受けることは一度もなかった。しかし、この1年間では今までより濃く、学びある授業に出会えたと思う。特に2つの授業について紹介したい。

まず、佐々木尚毅先生の「職業指導概論」である。この授業では、日本の教育課題と社会課題を扱い、主に海外の実情と比較することで日本の現状を浮き彫りにした。私はこの授業を受け、賢い選択をしていくためには「当たり前を疑う」という視点が大切だと感じた。そして、私が自分の生きる社会に関心を持っていなかったこと、物事の表面しか見ていなかったことを思い知った。まず、授業の



中で妙に腑に落ちた「無用の用」についての話がある。

この図は子どもが人生を進めていく様子を一本の橋に表している。今の社会では効率性や結果が重視され、効率よく生きていくために必要なものが子どもたちの前に用意されており、子どもたちは教室や塾の中で、大人に言われるがまま、学力・成績の「厚さ」を増やすことばかり続けている。確かに、足を置くための幅さえあれば、人は歩いて行けるはずだ。しかし、橋に足を置く分の「幅」がなければ、足を踏み外して、橋から落ちてしまうのが恐ろしくて、安心して前に進んでいくことが出来ない。

橋の幅というのは、教室や教科書の外にあるもので、地域の大人と関わること、自然の中で遊ぶこと、ものをつくること、味わって食べることといった経験だ。例えば、家や学校で大人との関係がうまくいかない時、近所のおじさんと話すことが心の支えになるということもあるだろう。実際には、その広い幅に足を乗せることはないかもしれない。しかし、この幅があることで得られる安心感、心の豊かさが、子どもたちの可能性を広げ、恐れることなく、自分の足で人生を切り開いていけるようになるというものだ。この考え方から、私は効率性を重視すれば簡単にムダであると取り除かれる空間、時間こそが、生きる力を育てるのではないかという発見があった。

[無用の用についての図]



さらに、私は子どもの育ちについて考えた。現代社会を生きる多くの人々の傾向として「自己肯定感の低さ」や「社会への関心のなさ」があるとされている。そして、これらの特性というのは、子ども、学生時代の家庭や学校などの生活の場での経験の積み重ねによってつくられたものであると思う。例えば、私もそのひとりだったが、子どもは勉強が最優先で、食事作りや掃除、洗濯などにほとんど関わらずとも自分の生活は滞りなく進んでいったし、いい点数を取り、いい評価をもらうために勉強をした。このような子どもを育てる場を形作っているのは、今の社会に強く根付く効率性や利益、結果を何よりも重要とする価値観である。その中で生きる人々は、自分にとってどう生きることが幸せか、何を大切にしたいかを考えることもせずに、目の前に置かれた人生を歩もうとしているのだと思う。

テストでいい点数を取ること、評価されることに重きを置くのではなく、子どもたちが生きる時間の中に「人と違っていい」「自分の役割がある」と感じる経験を増やすことができれば、自分自身を愛せる、探求心のある、好奇心旺盛な、伸び伸びと生きる子どもが増えるのではないだろうか。そのような子どもたちが成長して、いずれ社会を形づくる大人になれば、今の社会に根付く風潮、価値観をも変えていくことも想像できる。このように、社会が正しい方向に変わるためには、遠回りに見えても、子どもが育つ場を問い直すことが一番の近道なのではないかということに気づいた。

この授業を受け、そのような気づきをしたことで、グリーンウッドにインターンシップで訪れた時には見えなかったものが見えるようになった。グリーンウッドが信念を持ち、続けてきたことは、この課題が山積みの社会の中でも、考え続ける人、関心を持ち続ける人、自分の手で人生を切り開いていける人を育てるためであるということ。そして、人を育てることで、この社会を根本から変えていこうとしているのだと、自分の中で理解することができた。

さらに、この授業では日本の農業の現状について学んだ。日本の農業の残留基準値が大幅に緩和されていること、世界各国で輸入禁止や販売禁止が主流となっている農薬を日本では国が推奨していること、遺伝子組み換え作物の安全性や環境に与える影響はないと確認されていないこと、安い肉は巨大企業の大量畜産工場で劣悪な環境で育てられていること等、自分が普段口にしている食べ物の背景には、自分の知らない事実があることを知った。その中でも特に危機感を感じたのは種子についてだ。現在、世界の種子のほとんどをひとつの巨大企業が支配しているが、日本も近年の種子法の廃止や種苗法の改正によって、これまで日本の農家がこだわって丁寧に作ってきた種子を守れなくなり、海外の巨大企業に売り渡すことになる可能性があるという。私はこれまで食べ物を生み出す種子についてまで考えが及ぶことはなかったが、日本の種子が巨大企業に売り渡される流れにあることを知り、このまま多くの種子が巨大企業によって支配されていけば、世界中どの土地でも同じような食べ物ができるようになり、地域ごとの食の多様性がさらに失われていくのではないかと危機感を感じた。このような食についての情報は国民の体、命に直接関わる最も大事なことであるはずなのに、私たちの多くは知らないということからも、日本の食が置かれている状況は、深刻であるのだと感じた。こうして日本の食の置かれた状況を知ったことで、私が1年生の時に訪れた高畠で農薬が全盛期の時代から長い間有機農業が続けられている意味を自分なりに理解した。私が出会った高畠の人たちは、日本の食を、人の命を守る選択をしていたのだと感じた。

ふたつ目の授業は、グリーンウッド代表、辻英之先生の「立教ゼミナール」である。春学期は「リスクマネジメント」というテーマで、新聞記者、救命士、法務教官、弁護士など、秋学期は「地方創生」というテーマで、児童養護、空き家、ソーシャルビジネス、食育などの分野から、辻先生と繋がりのある多くのゲストからお話を聞いた。

特に印象深かったのは、鹿児島県霧島市で地域の食文化とそこにある先人の知恵や思いを次世代に伝える活動をしている千葉しのぶさんの回だ。霧島市はお米が育たない地域であるため、あるものを工夫して郷土料理が発達したという。郷土料理や家庭料理というのは、地域にある材料で、家庭にある道具で作るものであった。こうした「あるもの」を活かす視点は栃窪集落やいだらぼちに根づくものと共通していた。さらに千葉さんは、郷土料理や家庭料理の中に眠る人の記憶や人と人との繋がりを伝えていくことを大切にしていた。そうしたお話の中で、私がドキッとした言葉があった。

「食べることの大切さを親が子に伝えきれていないんだよね」

というものだ。この言葉を聞いた時、簡単に想像できたのは、今の生活を続けて、いつか親になった時に、自分の子どもに食の大切さを伝えられないままの自分だった。食の安全が揺らいでいる今だからこそ、食べることの喜びや作ることの面白さを知り、食を通して周りの人と想いを共有する経験を重ねたい。千葉さんのお話を聞き、食のその先にある、どのように人と繋がりを築いていきたいか、何を大切に生きていきたいかということを考えるきっかけとなった。

この授業では、今まで出会ってこなかった大人に出会うことができた。彼らはそれぞれの仕事や活



動を続ける中で多くの苦労がありながらも、好奇心を絶やさず、楽しんで活動をしていた。ゲストたちの活動の根本には、それぞれの「おもしろい」「好き」「やってみたい」というような純粋な想いがあり、それは信念を持ち、活動を続けていく上で、何よりの原動力になっているのではないかと感じた。

このように、これまでの大学生活では自分がした体験、目にした光景、聞いた言葉などの表面にあることを知るにとどまっていたが、4年生の授業で出会った人たちとの関わりをきっかけとして、それらの物事には必ず背景があり、目を向けようとしなければ見えないものがあることを知った。

### —進路決断—

様々な土地を訪れ、自分の体で経験した上で受けた4年生の授業をきっかけとして、見えなかったものが見え始めたと同時に、これまで当たり前前に過ごしてきた自分の生活に私は違和感を抱きはじめた。例えば、安い方の野菜を買うこと、自分が食べているものが安全か分からないこと、足りないものがあればすぐに買うこと、東京の街に隙間なく建物が並んでいること、いい学校へいくために塾に通うこと、近所に住んでいる人の顔を知らないこと、犬のお散歩に行っても道に土がないこと。挙げればきりが無いが、このような日常生活の中で当たり前前に自分がしてきた行動や選択、見てきたものが、実はすごく不自然なことなのではないかを感じるようになった。自分の手を使わなくても、何不自由なく生きていけるが、自分の生活はあまりに多くのものに支えられていて、それがなくなった時に自分の生活は危ういものなのか、自分はいかに無力なのかということに気づいた。自分の生活は整っていて、綺麗で、無駄がないもので溢れているけれど、それは物足りなくて、つまらないと感じた。

私は「子どもと深く関わる仕事」を中心に就職活動をし、卒業後は児童養護施設に就職する予定だった。就職に先立って施設での宿直アルバイトも始めたが、長い時間をかけて子どもたちの人生に寄り添うことは、やりがいもあり、自分にも合っていると思った。しかし、このままでは、私は今自分の中にある違和感を抱きながらこの先の人生も生きていくことになるかと想像できた。私が抱いた自分の生活への違和感を解消し、気持ちよく安心して生きていくために、自分の手を使って、生きていく術を身につけたいと思った。

さらに、これまでは「子どもと深く関わる仕事をしたい」と考えていたが、4年生での学びを踏まえた上で自分の未来を想像した時に「生きることの豊かさを伝えられる大人になりたい」という想いが生まれた。人が繋いできた想い、食の大切さ、生み出す楽しさ、人と関わり合う喜び、そういった生きることの喜びや面白さを、自分の経験を通して、伝えられる人になりたい。それは子どもと関わる仕事をする上でだけでなく、いつか親となった時でも、近所の大人としてでもいい。私自身、学生時代に出会った素敵な大人の言葉や姿勢、生き方に触れる中で、自分自身が大切にしたいものを知った。それは時間がたったとしても、自分にとって大事なことを決める時の判断軸となり、背中を押してくれている。子どもたちと出会う大人たちが、どのような姿勢で向き合うか、何を大切に生きているかは、子どもたち自身がどのように生きていきたいかに影響を与えているのだと思う。私も出会う人たちの生き方の選択肢を広げ、背中を押せるような生き方をしたいと思うようになった。

そうした想いを叶えるため、グリーンウッドの「1年間の教師・指導者育成プロジェクト」に参加することに決めた。就職ではなく、簡単に言えば大人の山村留学のようなもので、相談員の仕事しながら、1年間子どもたちと共に暮らす。参加することにしたのは、伝えられる大人に近づくため、また自分の手に生きる術を身につけるために、今の私には地域に根差した暮らしに丁寧に向き合う経

験を重ねることが必要だと思ったからだ。その経験を積むのには、暮らしに向き合い続けてきた人たち、生きる豊かさを伝え続けてきた人たちがいるグリーンウッドで間違いないと直感した。

立教大学での4年間の大学生活を振り返ると、いくつもの経験、人、言葉、生き方といったものの出会いが、私の中で繋がり、今の私を作っていることを強く感じる。これから先も自分がどのように生きていきたいか、何を大切にしたいか、心に問いかけながら、一つひとつの選択をしていきたい。

# 「立教のスピリット・オブ・ミッション」 —チャニング・ムア・ウィリアムズの「道」の継承—

立教大学チャプレン  
中川 英樹

## 1. はじめに

2014年4月より、立教大学チャプレンとして奉職しております、中川英樹と申します。2016年度からRSLセンターの主管科目「大学生の学び・社会で学ぶこと」の授業を担当させていただき、また2018年度からはボランティアセンターの副センター長としての任を与えられています。立教大学にとって、RSLセンターと、ボランティアセンターは、立教の建学の精神の実践に直結する大切な部局であり、その両部局に、職員でも教員でもなく、チャプレンという立場で横断的に関わらせていただいていますことは、とてもユニークなことだと感じています。

現在、サービスマーケティングを展開している大学は数多くあります。またボランティアセンターも多くの大学が有しています。そこで、もう一度、原点に戻りつつ、考えておきたいのが、「立教の」ボランティアリズムとは何か、「立教の」サービスマーケティングとは何かという点です。他大のそれと何が違うのか。わたしたちは、この点を明確にしつつ、徹底的に「立教の」に、こだわる必要があるのではないか、そのようなことを最近思い始めています。今回は、今、与えられている、この稀有な立場から、「立教の」サービスマーケティング、「立教の」ボランティアリズムについて、少し思うところを自由に書かせていただきたく存じます。

## 2. チャニング・ムア・ウィリアムズの伝えたかった「道」とは何だったのか？

さて、「立教の」という点にこだわるために、少し、校史を遡っておきたいと思います。

今年、立教大学は創立147年を迎えます。本学はアメリカ聖公会からの宣教師チャニング・ムア・ウィリアムズによって1874年に創立されました。東洋伝道を志した、若きウィリアムズがジョン・リギンスと共にニューヨークを出港したのが1855年。二人ははじめ、中国・上海を拠点に、中国での宣教活動を行う傍ら、日本での宣教の準備を進め、1859年、はじめて日本の地を踏みしました。ウィリアムズとリギンス、この二人は江戸幕府による鎖国政策の実施以来、はじめて日本にやって来たプロテスタント系教派の宣教師と紹介されます。さて、当時の日本は、キリシタン禁令の高札が撤廃されてはいませんでしたから、日本に行っても何もできない、ウィリアムズはそういう状況を十分理解した上で来日したということになります。来日後、長崎に居住したウィリアムズは、日本語の勉強に励み、キリスト教に関する文書や、礼拝に用いる祈祷書や聖歌の翻訳を進めながら、宣教活動が可能になる日を祈りつつ待ったと伝えられています。その後、ウィリアムズは、中国伝道主教としての任命を受けるため、一時、母国アメリカに帰国しますが、主教となり、中国に戻って、東洋伝道の拠点を、その中国から大阪に移し、再来日することになります。しかしここでさらに、キリシタン禁令の高札が撤廃されるまで、4年というときを待たされることになりました。そしてついに、1873年に高札が撤廃されると、ウィリアムズは、その年の11月に、居を江戸に移し、日本での宣教を本格的に開始すると共に、翌1874年2月に、築地居留地の一角に立教学校を開設しました。

ところで、ウィリアムズが立教学校を開学した1874年という年には、確かに、キリシタン禁令の高



札が撤廃されてはいましたが、270 年にも及んで染みつけられた、キリスト教への嫌悪感情が一朝一夕に払拭されるわけではなく、キリスト教に対する弾圧や妨害は日常的に続いていたと言われています。キリスト教を公に宣教しても捕まることはない程度の状況、しかも、キリスト教信徒など全く居ないという状況の中で、立教は開学したのです。キリスト教について学びたいという人も皆無、まして、キリスト教の学校など、誰も欲していないような現実の中でウィリアムズは立教をつくったのです。それまで、日本宣教などを断念して帰国する機会などいくらでもあったはずなのに、それでも、ウィリアムズが日本を離れず、踏みとどまって、立教を開学したのは何故なのでしょう？

ウィリアムズが、そこで教えたのは、主に聖書、そして、英語、世界史だったと言われています。それらどの科目も、とくに聖書などは、明治 10 年代の日本において、「実学」として要求されている科目では全くありませんでした。ウィリアムズは、明治維新、文明開化期の日本において、過度に功利主義、物質主義的に青少年たちが傾斜していくことに強い危機感を抱いていたとも言われます。けれど、それだけが、ウィリアムズが、立教を開学した理由ではなかったと思います。ウィリアムズはキリスト教の聖職者でした。しかも聖公会の主教という職位を担う者でありました。キリスト教の聖職者なら誰もがそうであるように、それらの者たちに与えられた使命は、単純素朴に「神の愛に倣う人を創り出す」ということです。もっと簡潔に言えば、「愛のある人」を、ということです。わたしは、ウィリアムズの立教開学の意図も、そこにあったと受け取っています。

立教は、ウィリアムズという一人の聖職者の、その深い信仰によって支えられ、師の「神の愛に倣う人（愛のある人）」を創り出さなければならないという、ただその強い一念から始まった学校なのだと思うのです。しかも「私塾」という形で。それは教会史的には、宣教活動の一環として理解されるかもしれませんが、そもそもの出発は、「神の愛に倣う人」を創り出さなければならない、という、ウィリアムズの無償の贈与（ボランティアズム）によるものです。教育を施すというよりは、この日本を、神の愛に溢れたところに変容していくための「仲間（人）づくり」。そのために、ウィリアムズは、立教という私塾をつくり、そこで、自らが献身的に関わりつつ、何よりもまず、一人ひとりが、これ以上ないほどに、神の目に尊く価値ある存在として見つめられていること、その一人ひとりの尊厳は、その根底から肯定されていることを、伝えようとしたのだと思うのです。そして、その経験の提供をもって、自己が定位する社会の課題、希望を眺望することのできる人、「神の愛に倣う人」を育もうとしたのです。立教という学び舎（場）は、まさに、ウィリアムズによる、サービス（無償の贈与）とラーニング（学び）の実践の場として始まったのでした。

愛に倣う者は、自分に向けられた愛を知ることを通してのみ創られていきます。わたしは、ウィリアムズ主教と同じ、聖公会という教派に属する聖職者として、それこそがウィリアムズが、この立教で、伝えたかった「道」であり、立教が立教として、こだわるべき「立教の」固有性、オリジナリティだと確信しています。そして、これらのことは、何も難しく捉える必要も、難しい解釈も必要のない、ただただ、真っ直ぐな、ウィリアムズからのメッセージなのです。

そのウィリアムズのメッセージに呼応して、最初の年に 8 人（5 人とも伝えられてます）の少年たちが入学してきます。時間があれば、この 8 人のことを追跡して、一体、何に惹き付けられたのか、その理由を可能な限り辿ってみたいと願うものですが、この 8 人は紛れもなく、ウィリアムズを通して、立教という学び舎において、神の愛について知った、最初の人たちであったと信じてみたいのです。そして、この 8 人の内に生じた「存在そのものへの肯定」という経験が、彼らをして知的に輝かせ、その輝きが、結果として、後の立教の急速な学生数の増加につながったのだと推察されます。嬉しそうな人の笑顔に、楽しそうな人の姿に、人は集まって来るものだからです。

### 3. 「立教の」ボランティアとサービスラーニングの変遷

創立以来、立教の教育的営為、その DNA の基幹には、ウィリアムズから綿々と続く、ボランティアとサービスラーニングの理念が刻み込まれていることは疑う余地のないことです。立教において、ボランティア、そして、サービスラーニングを知り学ぶ、あるいは行う、触れる、ということは、実に、ウィリアムズが伝えたかった「道」に、つまりは、「立教の」固有性、オリジナリティに、直接的に出会う、ということなのだと思います。

さて、これまで何人もの先達たちが、立教史におけるボランティアについて、論考をまとめられています。立教が、社会に「ボランティア」という言葉が定着する以前から、ボランティア活動を行ってきたことは自明です。またサービスラーニングは 2012 年以降、大学における新たな教育方法として高等教育機関間で急速に展開されはじめたものですが、立教においては、前述したとおり、サービスラーニングの理念はそれ以前から培われていたものです。目に見える形で現出するのは、2013 年度のパイロット授業の立ち上げ、また 2016 年度の RSL センターの開設においてですが、以降、同センターを中心として本格的な RSL 科目が展開されています。ここで付記しておきたいのは、そのように、立教が充実したサービスラーニングを展開できるのは、その背景に、これまでのサービスラーニングの理念、そして、ボランティア、つまりは、「学び」と「場」との信頼的な関係の豊かさの堆積があるからにほかなりません。

立教は、「専門性に立つ教養人」の育成を、自らの教育理念を顕す重要なキーワードとして謳っています。この語は、立教がリベラル・アーツ・カレッジであることを端的に物語るものです。リベラル・アーツとは、11 世紀から 12 世紀にかけて、ヨーロッパで大学が誕生した時期に、神の真理のことは理解するため、神によって作られた被造物の秩序を理解するために、体系化された基礎的な科目群として整備されたものですが、その後の歴史の経過と共に、専門科目と併走しながら、利己主義を退け、世界全体から自己を捉え、定置することのできる知力、答えの出ない事態に耐える力（ネガティブ・ケイパビリティ）、そして、人間社会の一員として未来を眺望できる洞察力の醸成のための不可欠な基礎的な科目群として、再評価され、意味と価値を有することになっていきます。立教は、創立以来、一貫して、このリベラル・アーツ・カレッジであり、戦後の歩みにおいても、その実践的な働き、役割を保持し続けてきたと聞きます。また、1991 年の大学設置基準の大綱化において、他大の多くが、専門科目の充実に注力していく中で、立教は、決して「教養」関連科目を手放すことはなく、むしろ、全学の教養教育を担う組織体として、全学共通カリキュラム運営センターを発足させ、「全学共通カリキュラム」をスタートさせていきます。

立教の「全学共通カリキュラム」の構築と展開に大きく寄与された、寺崎昌男先生の「専門学そのものの意味を、自分自身の生き方との関係において問い直し、課題意識を持ちつつ学ぶことのできる学生を育てる」との言葉は、まさに、ウィリアムズが、この立教で、伝えたかった「道」、「成し遂げたかったこと」を見事に表現していると、わたしには思えます。そして、その願いの結実を、「専門性に立つ教養人」の育成という言葉に見ることができます。

わたしは、「専門性」とは、各学部での専門的な学び、その学びの広がり、深化、応用性を知っていること、さらに、「教養」とは、他者と関わる感性があるかどうか、ということだ、と常々思ってきました。「専門性に立つ教養人」とは、決して、「頭でっかち」ではなく、他者にキチンと寄り添える人のこと、ウィリアムズの「道」を汲み取れば、「神の愛に倣う人」のことです。

そして、立教は、そうした人材の育成の学びの仕組みとして、「正課教育」と「正課外教育」の二

つを教育という営みの中心に置いて大切にしてきました。立教における「正課外教育」は、専ら戦後アメリカの大学から導入された SPS (Student Personnel Services) という「学生助育」の理念のもと、学生部を中心に展開されてきたと聞きます。立教は、正課外教育は、単に正課教育の援助手段として考えるべきものではなく、正課教育が果たすことのできない固有の役割を担当するものとの理解が浸透する、その遙か前から、この正課外教育の重要性に着目し、正課教育と同等の価値として位置づけていたのです。

その立教の「正課外活動」は、1955 年頃から、日常とは異なるリアルな現実に出会う体験を通じて、自己の生き方や社会を見つめ直す、きっかけづくりのために行われてきた「立教キャンプ」や、チャペル主導のボランティア活動とも協働しつつ、立教独自の学びの仕掛けとして、学生たちをキャンパスの「外」に送り出しながら、教室という日常では決して経験することのできない学びの機会を提供しました。ここに、キャンパス（座学）とフィールドとの往還的な学びの仕組みの具体的な在りようの萌芽を見ることができます。そして、それが今日の「立教の」サービ斯拉ーニング、「立教の」ボランティアの基点であったと理解されるのです。こうした、「立教の」サービ斯拉ーニング、「立教の」ボランティアの通奏低音には、つねに「神の愛に倣う人」を創り出すとした、ウィリアムズの夢とエートスが息づいていることは、繰り返して語る必要のないことのように思われます。

#### 4. 「神の愛に倣う人」を創り出すとした、ウィリアムズの「道」の継承

立教大学学生部が刊行している『RIKKYO CHALLENGE』という冊子には、こう書かれています。

「皆さんが学生生活を過ごす期間は、一人ひとりが自立した個人として社会に巣立っていくための“自分作り”を行う時期です。“自分作り”とは、「自分の価値観を形作っていくこと」と「社会における自分の役割を見出すこと」です。もちろんその答えは十人十色ですが、自分なりの答えを導き出すためには「さまざまな価値観を持つ人々と関わり、他者を理解する感受性を養いながら、自分の価値観を見つめていく」、「いろいろなことにチャレンジして自分の得手・不得手に気づきながら、他者との関係性の中で自分にできることを増やしていく」といった体験の積み重ねが重要です。自分で体験して自分で考える。それが“自分作り”の答えを導き出す方法なのです。」

ここに記されていることは、147 年前に立教を設立した、ウィリアムズの「道」の現代におけるリライトに思えてきます。「自分作り」…… わたしは、これを敢えて「じぶん創り」とさらにリライトしたいと思うのですが、この「じぶん創り」という創造的な作業を可能ならしめる場こそが「立教」なのではないでしょうか。わたしは、この言葉に、今の、この立教でチャプレンとして働きを果たすために、大きなヒントと励ましを貰っています。わたしの務めは、この立教で学ぶ学生一人ひとりが「じぶん創り」を果たしていくために寄り添うことだと自覚しています。そして、できることなら、「じぶん創り」という、壮大で厳粛な創造の歩みを経た上で、最終的には、立教で学ぶ学生全員が、「人に、ことに多くの困難や痛みを抱えた人に誠実に寄り添い、決して、その困難や痛みを見て見ぬふりをしない、見て見ぬふりができない人」、つまりは、「神の愛に倣う人」、もっと素朴に「愛のある人」を創り出さなければならない、とした、ウィリアムズが目指した「道」を継承しつつ、そのような人を、自らの内に彫り上げて欲しいと本気で心から願っています。

今、わたしが担当している RSL 科目「大学生の学び・社会で学ぶこと」の目的も、またチャプレン室で担当している「奥中山ワークキャンプ（岩手県一戸町奥中山にある知的しょうがい者施設でのフィールドワーク）」も、ボランティアセンターでの働きも、すべて、「人に、ことに多くの困難や痛みを抱えた人に誠実に寄り添い、決して、その困難や痛みを見て見ぬふりをしない、見て見ぬふりが



できない人」を育てたいとの思いにいき着きます。そうしたウィリアムズの道との連続性の中に、身体を置きながら、ここ立教での学びの時間の、そのすべてが深く関わり合っていることを強く思われます。わたしは、担当するRSL科目「大学生の学び・社会で学ぶこと」のサブタイトルを、「キリスト教の『間』係学」としています。「学び」とは、その本質において、他者のまなざしをもって自己をまなざすこと（離見の見）だと理解するからです。

近年、若者たちの「体験の欠如」が云われています。若者たちの文化は「検索文化」とも揶揄され、彼らは必要な「答え」を、彼らの「手の中」で入手していきます。それは若者に限ったことではなく、今や、多くの人たちが、その「検索文化」の中に取り込まれている感があります。自らの人生についても、手の中に溢れる、見知らぬ誰かの、成功体験の数々に、探すべき「自分」の姿を重ね、投影し、そして、現実にはそうはなれなくて、絶望を繰り返しています。わたしのチャプレン室を、ときどき、そんな悩みをもった学生が訪ねてくることがあります。授業後のリアクションペーパーにも、深い悩み、葛藤、生き難さを書いてくれる学生もいたりします。きっと、そのような悩みを持つ学生は、このキャンパスには少なくないのだと思います。わたしは、そのような学生と出会ったときには、学生部やチャプレン室が「立教の」正課外プログラムとして提供している「キャンプ」に往くことやボランティアに参加することを勧めることにしています。「手の中」になんか、各々が求めるべき人生の答えなど決してないからです。そもそも「答え」なんか最初からないのかもしれませんが。立ち往生したり、失敗したり、傷ついたり、励まされたり、支えられたり、理解されたり、判り合えなかったり、そんな他者とのやり取りの先に、そして、「場」に立つことによって、ようやく、自分の「輪郭」が見えてくるのだと思うのです。少なくとも、自分の時間を割いて、今の安心感の充溢した「居場所」から離れて、たくさんの人と出会う、その人が生き暮らしている環境に身を置きながら、その人にしか語ることのできない言葉たちに、物語に触れていくこと。思いっきり嫌な想いをすること。恥をかくこと。そうやって、自己を自己から引き離して、まなざすことこそが、「じぶん創り」のための近道なのだと考えます。そんな勧めに呼応してくれて、「キャンプ」に参加してくれる学生が毎年少なからずいますし、ボランティアを始める学生もいます。それはたいへん嬉しいことですし、そんな学生がもっともっと増えていくことを切望しています。

チャプレン室を訪ねてくる学生のほとんどが「傷つきやすさ」、そんな感性をもった人たちのように感じます。傷つくことに怯えながら、それでも、他者との関わりを手放せなかったりする人たちがいたりします。でも、その人たちを通して、それぞれが抱えた、そういう「弱さ」こそが、実は、誰かを支えていたり、励ましたりしていることを、いつも、その人たちの方から教えられています。現代社会は、これができたらと云う、条件付きでしか人が評価されなかったりします。何をするにも、資格と能力を問われます。「できないから助けて」、「判らないから教えて」などと決して言える雰囲気にはありません。けれど、今の社会において、ほんとうに取り戻さなければならないことは、「できないから助けて」、「判らないから教えて」と言えることだと思うのです。

ウィリアムズが、「神の愛に倣う人」を創り出さねば、と祈り続けた、その先に描いていたのは、そういう社会の実現だったのではないかと思います。この社会…… 思いが通い合わないことばかりです。でも、そうだからこそ、そこから、人は、思いを通わそうとする努力を始めるのだと思うのです。判り合えないこと、それは、嘆くことではなく、判り合えない、ということ、そのものが、実は、出会いとできごとの、そんな旅の始まりであることを思います。そして、互いに違うからこそ、その違いが「わたし」という存在を、この上なく、際立たせてくれているのだ、ということ、この世界をこれ以上ないほどに素敵に輝かせているのだと思います。そんな気づきへの仕組みが、「立教の」

サービスラーニングの実践に、「立教の」ボランティアセンターの働きにはあると信じます。

## 5. わたしたちは、何をしたいのか

そのような、系譜に立つ、立教のすべての教職員には、ウィリアムズの道を実践するという責務があると思うのです。それは、学生たちが今、この立教という学びで、懸命に取り組んでいる「じぶん創り」の作業に関わることと同義です。わたしたちのすべてに共通する願いは、学生一人ひとりの成長のはずです。それも「神の愛に倣う人」としての成長です。それを公言することには、少し恥じらいがあるかもしれません。けれど、それを臆面もなく語り始めることに、わたしたちの働きの「はじまり」があるのだと信じます。そして、わたしは、そこに「わたしがチャプレンである」ことの意味と価値を見いだしています。それが語れなかったら、わたしたちチャプレンがいる意味は消失するし、立教がキリスト教信仰に、ウィリアムズの伝えたかった「道」に連なる大学としての価値を失うからです。

ところで、チャプレンとは、キリスト教信仰を基とする教育、医療、福祉機関などにおいて附設されたチャペル(礼拝堂)で働く、キリスト教の聖職者(牧師)たちのことを言います。聖職者とはClergyという語の訳語です。集合名詞なのだそうです。そして、教授・教師と訳されるFacultyも同じ、集合名詞だと聞いたことがあります。教会における宣教の働きが一人の聖職者によって為すことができるように、教育の働きもまた、一人ではどうにもならない、他のたくさんの人たちとの連帯と協働を通してしか、その働きは果たせないものです。学校の善し悪しは、その集団の善し悪しによって決まるものです。違う言い方をすれば、「良い大学」は、集団が創り上げていく、ということです。そのために、わたしたち一人ひとりが、まず、学生一人ひとりに「興味を持つこと」の大切さを思いいます。朝、勤務へと向かう途中、すれ違う学生一人ひとりに声を掛けることがどれほどあったでしょうか。わたしには「全くできていない」という反省があります。学生たち一人ひとりが、自分に興味を持たれていることを知ることは、決してマイナスには作用しないことだと思います。教育とは、教職員個々の能力ではなくて、「共同体の機能」だと思っています。共同体がちゃんと機能していれば、自ずと、人は育ち始めるのだと思うのです。そして、その基点に、ボランティアセンターとRSLセンターは「立教の」それとして位置しているのだと考えます。少なくとも、これらの部局に連なる教職員、スタッフには、学生一人ひとりへの興味関心を手放して欲しくない、と願っています。

立教大学は、「St. Paul's University」とも云われることがありますが、それは、立教が、「聖パウロ(St. Paul)」を守護聖人としているからです。聖パウロは、当初はキリスト教に反対して激しく迫害しましたが、回心を経て、異邦人宣教の使徒となり、紀元65年ローマで殉教した、と伝えられています。聖パウロは地中海沿岸の主要都市に教会を設立していきましたが、ローマに建てた教会に書き送った手紙の中に、「泣く人と共に泣き、喜ぶ人と共に喜びなさい」(ローマの信徒への手紙12章15節)と言葉を書き遺しています。後の教会は、そのように「泣く人と、喜ぶ人と共に」在れることを、キリスト者として生き方の基本、「教会」という共同体の理想としてきました。しかし、「泣く人と共に泣き、喜ぶ人と共に喜ぶ」というとき、この泣く人と一緒に泣こうとする自分、喜ぶ人と一緒に喜ぼうとする自分、その間には、つねに乖離というか、大きな断絶があるように、どうしても思えてしまうのです。共同体とか、共生社会とか云うと、必ず、自分がどうやって他者と共生していくのか?自分が弱者をどう支援するのか?そうやって、ほとんどの場合が、自分の能力の問題として、自分を中心に据えて、自分の側から考えて、その事柄と向き合おうとします。でも、共生社会とか、共同体を、そういう自分の側から、自分の能力に依存して発想している限り、そこには自ずと自己の

限界が立ち顕れます。まして、人間の成長に関わる「教育」などについては、その実践を自己の能力やスキルに依存している限り、その自己の能力では、現前の問題や課題がもう手に負えないものになったとき、その瞬間に崩壊していきます。「自己の限界が、共同体の限界となってはならない」それが、共同体形成の鉄則です。

自分の現前にいる人が、援助の対象などとしてはなく、まして、自分が援助の主体でもなく、もっと、他者が自己の拡大としての他者というか、他者が別の形をとった自己であるかのように感じられていくこと。上手く云えないのですが、高齢者は「いずれそうなる自分」です。子どもは「かつてそうであった自分」です。他者は「そうであった自分」、「そうなるであろう自分」なのだと思うのです。他者と向き合うことは、ほんとうは、そういう自己の「これまで」と「これから」への向き合いなんじゃないかと強く思います。他者のすべてを自分のこととして感じ、受け止める……。他者の喜びや涙の中に、身体を置く、身体をねじ込みながら、その喜びや涙で、もう自分の輪郭が判らなくなっていくような経験、それがわたしたち「立教」に生きる者が、学生一人ひとりに対して、否、自らに対しても、知り感じていくことだと思うのです。イエスという人は、「隣人を自分のように愛しなさい」と語りましたが、それは「自己と他者との境界解消の勧め」のように思います。そうじゃないと、隣人を自分のように愛せる筈がない。愛するとは、自己と他者の境目が曖昧になることです。そんなことを目指すためには、「わたしじゃなきゃ」とか、「わたしなら何とかできる」とか、そんな傲りから抜け出て、そんな自分を手放して、むしろ、できない自分をさっさと認めて、共同体の力を信じること、そして、仲間が存在を信じる必要を思います。つまり、他力を信じるべきなのだと、わたしは思うのです。「他力で」、つまり「できないから助けて」、「判らないから教えて」と平然と言える雰囲気、教職員たちこそがなんとか実践してつくり出せないかと思うのです。そういう雰囲気の中で、人は安心して、自らの「欠け」や「弱さ」を物語れるのではないのでしょうか。誰かが語る弱さの物語の前で「わたしもそうだった」という安心して絶望できる学び舎が、「立教」で在ってほしいと、わたしは心から願います。

## 6. おわりに

学生たちの「場（フィールド）」に赴くことの必要性を説くわたしたち教職員にとって、自身の「場（フィールド）」とは、では何処なのでしょう。それは、学生たちのいるところ、学生たちが「じぶん」を「創ろう」としている、その直中であることは自明です。わたしたちの方こそ、そこに赴いて往かなければならないはず。わたしたちの日々の営みが、学生一人ひとりの生きる、その「場（フィールド）」で、教える者と学ぶ者という主客を超えて、どう受肉していくのか。わたしたち自らにも、サービス（無償の奉仕／ボランティア）とラーニング（学び）という、学生たちに対する、寸暇を惜しんでの実践が求められているように思います。「書を捨てよ、町へ出よう」と語った寺山修司を批判するわけではありませんが、「書を持って、町へ出る」ことが、サービス（奉仕）・ラーニング（学び）であり、そうやって、場で書を開いてみれば、またいつもとは違った、見晴らしの良い場所に立つことができるかもしれないと思います。

ところで、「場」とは何か？学生たちは「場」に赴いて何を学ぶのでしょうか？「場」には何があるのでしょうか？正課外教育を正課教育と同等に価値あるものと位置づけ、「教室（座学）」と「場（フィールド）」を結ぶ、その結び目に「学び」の本質を見い出してきた立教にとって、どのくらいの「場」の理解が深まっているのでしょうか？そして、今の「立教の」サービスラーニング、「立教の」ボランティアの一つの課題は、その「場」をあまりにも「神聖化」している点にあるように感じます。



「場」に往けば変われる、気づくべきことに気づく、そこに見い出す課題、そして自己に出会える・・・などなどの期待があります。確かにそういうダイナミズムが生まれることも事実です。劇的な変化を見せる学生も確かにいます。けれど、同じ数だけ、「場」に赴いたことで、自信を喪失していく学生もいるということをわたしたちは知っておく必要があると思います。過度なほどの「場」への期待を学生に持たせることで、逆に学生を傷つけてしまうことがあるのです。場に赴いても何も得るものがなかった、自分の課題を見つけることができなかった、けれど、それらは、多くの学生が実際に経験していることのように思うのです。「キャンプ」などでは、学外に出て行き、長い期間を一緒に過ごし、毎夜振り返りをし、何に気づき、何を得たかを語り合います。けれど、そこで分かち合われることは、大概、得たこと、気づいたことであって、決して、得られなかったこと、気づけなかったことが分かち合われることはありません。そこでは、得られなかった、気づけなかった、変われなかった学生は「沈黙」を強いられていくのです。

学びとは「無駄」の積み重ねです。しかし、得られなかった、気づけなかった、変われなかった自己を知ることは決して無駄なことではないと考えます。ある学生が語ってくれた言葉がとても印象的でした。その学生は留学体験があり、様々な「場」に関わり、アクティブに活動している学生でしたが、それら経験の中で学んだことは、「変わらない自分がいることへの気づきだった」と話してくれました。変わることが是と期待されることの中で、「変わらない自分」、「変える必要のない自分」との出会いは、何にも変えることのできない、とてつもない大きな経験だったと思うのです。

年度末を迎え、RSL センターも、ボランティアセンターも、年次の活動報告書をまとめられている時期だと思います。そこで一つのお願いは、どうか、それらの報告書には、参加者の「成功体験」と共に、「失敗体験」も記載して欲しいということです。得られなかった、気づけなかった、変われなかった自己との向き合いの記録こそ、残して欲しいと願います。そういうことを惜しみなく表現できるところに、人は魅力を感じたりして、「わたしも行ってみよう」と思ったりするものです。

147 年前、「神の愛に倣う人（愛のある人）」を創り出さなければならないという、ただその強い一念から、立教を創立したウィリアムズ。その彼は、今、この立教をどのように見つめているのだろうか、考えることがあります。この大学に染みついた、無償の贈与（ボランティア）と、サービス（奉仕）ラーニング（学び）の、その理念は、ウィリアムズが描いていたような形で結実しているのでしょうか。そして、何よりも、「わたし」という存在が「神の愛に倣う人（愛のある人）」で在れているのだろうか。学生一人ひとりと向き合うことを億劫に想ったことは、これまで一度もなかっただろうか。忙しいを言い訳にしたことはなかっただろうか。今、自戒を込めて、改めて自分のことを、そして、この大学のサービスラーニングとボランティアについてを見つめ直しておきたいと想います。

「道を伝えて、己を伝えず／Teach the Way, No the Self」

どこまでも、ウィリアムズの示した『道』を辿り往く者で在りたいと願います。